

東京湾

帝国書院 地図編集室

はじめに

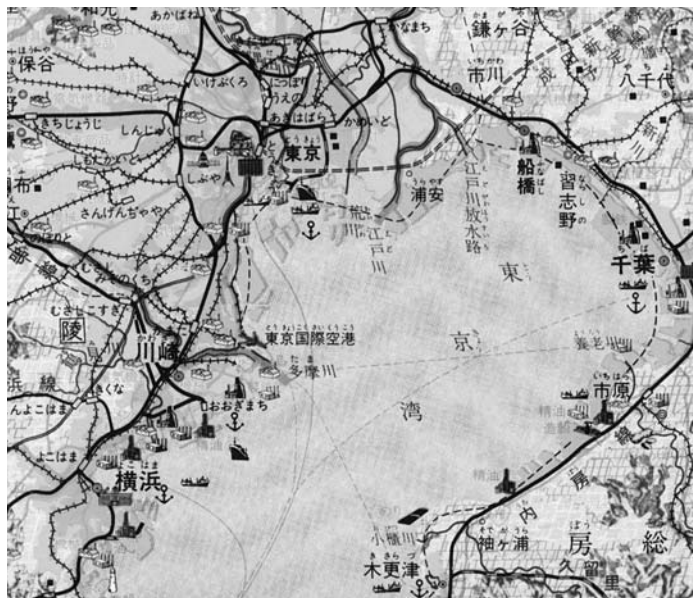
この30年を振り返ると、社会の変化はめざましいものがあります。ここでは10年ごとの小学校地図帳（1974、84、94、2004年）に描かれた東京湾周辺の図をとおして、その変貌をたどってみたいと思います。

1. 1974（昭和49）年「小学校社会科地図帳 初訂版」

高度経済成長から日本が順調に成長を続けていた時代で、地図帳の表記も産業中心でした。早くから埋め立てがすすんで工業地帯を形成していた京浜地区では、工場の絵記号が多くみられ、製鉄や造船がさかんだったことがみてとれます。市街地も東京から横浜にかけて南部に大きく広がっています。一方京葉地区では、浦安や習志野など埋め立てが進んでいないところがあるほか、市原や千葉に精油などの工場が点在している段階でした。同様に東京都から千葉にかけての市街地のつながりはそ



れほどではなく、江戸川放水路河口や市原周辺などに、豊かな水田地帯がみられるほどです。工業の発展に並行して、当時は公害が深刻な社会問題で、東京湾の水質汚濁も著しかったようです。



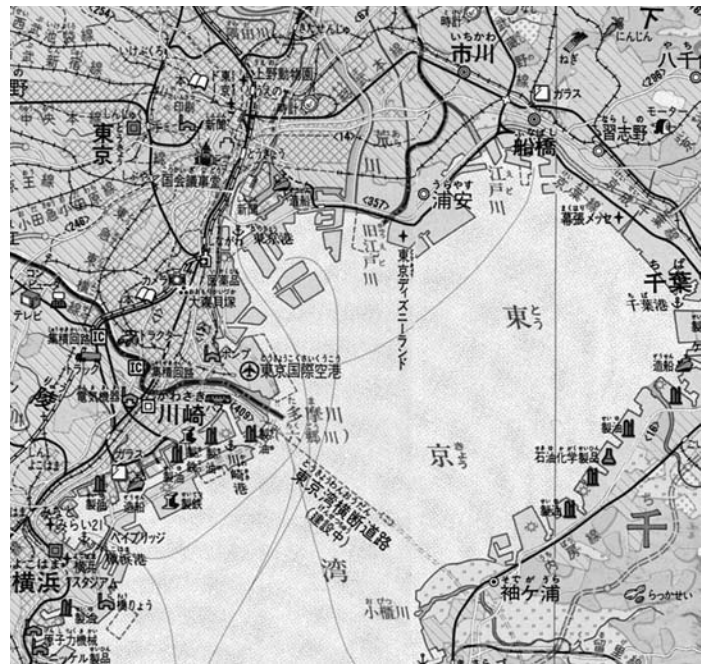
2. 1984（昭和59）年「小学校社会科地図帳 初訂版」

80年代に入ってさらにこの地域の工業化はすすみ、バブル開始直前の当時、ピークを迎えていました。地図では京葉地区の工場の絵記号の数が増え、目立つように大きく表現されています。また京葉の臨海部にも精油、化学製品などの工場が増え、埋め立て地も広がっています。浦安、船橋、習志野など東京都に隣接する千葉県では宅地化が進み、人口も急増して浦安は市に昇格しました。「おみなニュータウン」の記号も大きく記載され、東京を中心とした通勤圏のとらえ方が重視されはじめました。しかしながら千葉市から南は、工場地域と農業地域が隣接しており、大きな変化はみられません。首都高速湾岸線など湾岸部を囲む高速道路が予定線で記載されており、その後の臨海部開発ブームの予兆が感じられます。

3. 1994（平成5）年「楽しい小学校社会科地図帳 最新版」

バブル経済期の産業構造の変化により工業の空洞化がすすみ、「もの」づくり以外の産業が発展した結果、埋め立て地の土地利用にも変化がみられるようになりました。都心部のオフィス不足を補うために、地理的に近い湾岸部の倉庫や工場跡地が注目され、「ウォーターフロント」開発がさかんになりました。横浜では89年に開催された横浜博覧会場として、臨海部の造船所跡や埠頭施設が再開発され、新都心みなとみらい21の建設がはじまりました。千葉方面では幕張に臨海新都心が建設され、京葉線で東京駅と結ばれました。地図帳でも工業の記号はやや控えめになり、東京ディズニーランドや幕張メッセなど、レジャーや商業に関わる施設が記載されるようになりました。いわゆる「生産」中心の地図帳から「消費」に着目しはじめた時代でした。

4. 2004（平成16）年「楽しく学ぶ小学生の地図 最新版」



今日の地図では「環境」の視点が大きく取り扱われることが、最大の変化です。東京湾にも「おもなごみの処理場」や「守りたい美しい砂浜海岸（白砂青松）」、ラムサール条約登録湿地、貴重な動物・植物など、さまざまな要素が記載されるようになりました。臨海部のレジャー施設などもイラストで大きく扱われるようになりました。一方臨海副都心が完成し、ゆりかもめ、東京臨海高速鉄道などで都心部と結ばれました。東京湾を横断するアクアラインも開通し、湾岸部を一周できる交通網が完成したわけです。現在では、お台場のレジャー施設やディズニーリゾートなど集客力のある施設や企業が移転したことから、東京の中心は臨海部に移りつつあるといえます。

おわりに

あらためて30年前の地図を見直してみると、現在に比べて東京湾の海の部分が広く感じられます。人口の埋め立て地が広がったことにより、時代とともに東京湾がどんどん小さくなっていることがわかります。